
税理士 無料公開講座シリーズ

S e a s o n 7

～ テーマ ～

『財務諸表論 理論暗記セミナー』

TAC税理士講座

平成24年2月25日

担当：杉田亜紀

財務諸表論 理論暗記セミナー

「財表の理論が覚えられない」「少しずつ覚えているけど、すぐに忘れてしまう」「そもそも、財表に暗記は必要なのか」・・・このような悩み、不安を少しでも軽減できるよう、理論を覚えるコツをご紹介します！

目 次

<ページ>

① はじめに	1
② 暗記の必要性	2
③ なぜ覚えられないのか?	3
④ 暗記の手順!	5
⑤ 暗記の定着!	8
⑥ 暗記に挑戦!	9
⑦ 終わりに	14

1 はじめに

財務諸表論の理論は会計理論等を背景とした上で、会計基準の細部まで出題されるため、満点をとることが難しい問題も出題されます。そのため、基本的事項から応用的なものまで、会計理論上の幅広い理解が必要となります。

しかし、このような問題に的確に対処するためには、会計理論や各会計基準等の「理解」だけしておけばいいというわけではありません。理解していることを試験委員にアピールするためには、その理解した内容を答案に反映させる必要があります。本試験は実際に論述して解答をしなければならず、この論述式の問題では、その解答要求につき適切な会計用語を用い、かつ適切な文章構成で解答できなければ合格点は確保できないと考えられます。

本セミナーでは、解答に必要な文章を上手に覚えるコツを紹介していきます。

2 暗記の必要性

財務諸表論の理論では論述形式の問題が出題されます。論述とは、「自分自身の言葉で作文することだ!」このように思ったこともあるでしょう。それでは、なぜ論述問題を解答するために暗記が必要なのでしょう。暗記の必要性について、こんな例をあげてみます。

(例) 目の前に「リンゴ」があることを相手に教えます。

* 「リンゴ」という言葉を知らない場合

ここに、赤くてソフトボール位の大きさで、果物で、食べると甘酸っぱくて、皮をむいてほっておくと茶色っぽくなってしまいう食べ物があります。

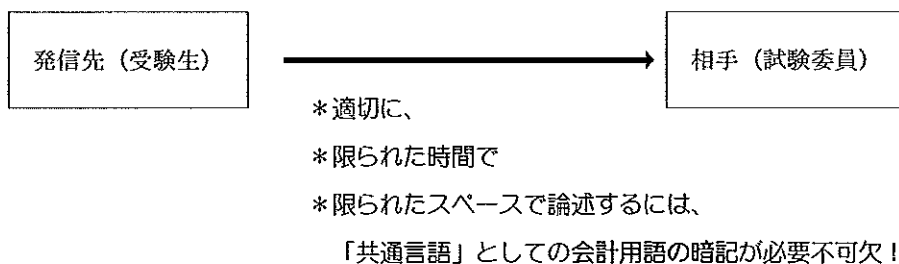
* 「リンゴ」という言葉を知っている場合

ここにリンゴがあります。

どちらが、効率的に相手にわかりやすく正確に伝わるか、一目瞭然ですね。

ここでいうところの「リンゴ」、これは共通言語であるため、「リンゴ」という言葉を使うことで、相手はもともと知っている「リンゴ」を思い描くことができます。この共通言語は財務諸表論の学習上(会計学上)でいえば「会計用語」に該当します。

「適正な期間損益計算」や「財政状態及び経営成績」のような用語は、会計学上、共通言語としての役割を果たします。このような用語を適切に用いることができれば、わかりやすく、正確にしかも短文で相手(試験委員)に伝わります。つまり、共通言語をたくさん増やす=会計用語を正しく正確に暗記することこそが、論述式の試験で得点をかせぐカギといえるのです。



もちろん、「会計用語」は暗記をした上で、自分自身の言葉として使いこなすことが必要です。

理論に充てられる解答時間はわずか約40分です。より速く正確に解答することが求められますので、このためにも正確な暗記が欠かせないのです。

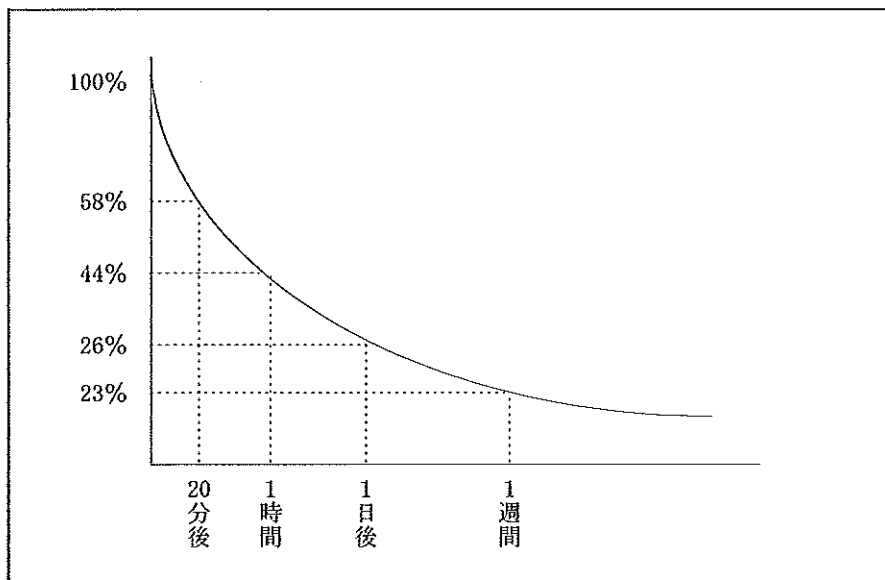
3 なぜ覚えられないのか？

「理論が覚えられない・・・」この原因を分析すると、およそ以下の2種類に分類されます。

- ① 覚えたはずのポイントなのに、すぐ忘れてしまう。
- ② 覚えたとつもりでも、答案を目の前になると言葉やキーワードが浮かばない。

まず①について考えてみましょう。

これについては、心理学者のヘルマン・エビングハウスの研究によると、記憶と忘却は以下のような「忘却曲線」で示すことができるようです。



この忘却曲線によると以下の事がわかります。

- 20分後 → 42%を忘却し、58%のみ記憶。 1時間後 → 56%を忘却し、44%のみ記憶。
1日後 → 74%を忘却し、26%のみ記憶。 1週間後 → 77%を忘却し、23%のみ記憶。

忘れていく記憶を定着させるためには

- ◇ 授業後、記憶が多く留まっているうちに暗記をはじめ。
- ◇ 翌日、翌々日、1週間後と時間をおいて暗記の反復を行う。

→ このように、「忘却量を抑える」「記憶量を増やす」の両アプローチが必要なのです。

参 考

記憶は、長期記憶と短期記憶の2種類

長期記憶・・・ 大脳に保存され、長期間保持される記憶をいう。

毎日の生活の記憶（エピソード記憶）、反復して覚えた記憶（意味記憶）等に分類される。

短期記憶・・・ テストの前の一夜漬けのように、必要なときだけ働かせ、しばらくすると忘れてしまう記憶をいう。

短期記憶を、長期記憶に置き換えるには？

- * 繰り返し行うことで短期記憶は長期記憶（意味記憶）に置き換わる。
- * その前提、背景、構成、画像、イメージ等を併せておさえることで、意味記憶がエピソード記憶に置き換わる。
- * 意味記憶とエピソード記憶はどちらも長期記憶であるが、意味記憶はきっかけがないと思い出せない記憶であるのに対して、エピソード記憶は意識的に思い出すことができることに違いがある。試験勉強で必要なのはもちろんエピソード記憶。
- * 「記憶力のいい人」は、このエピソード記憶の活用が上手な場合が多いと思われる。

脳は、正確に覚えるのではなく、あいまいにしか覚えられない

脳は、普遍的なルールを抽出し蓄積することによって、目や耳から入ってくる情報を処理している。つまり、あいまいで大雑把に記憶することによって、その記憶は応用力をもち、臨機応変な適用力をもつことができる。

したがって、意識的に暗記をしなければならない時には、「時間をおきながら、繰り返すこと」がコツ。



次に②についてです。

これは、次頁の「暗記の手順」がカギになります。

【手順2】少しずつ暗記をし、徐々に覚える文章を増やしていきましょう。

長い文章をいきなり一気に覚えるのは難しい…

最初は結論のみ、つぎに理由など徐々に肉付けして暗記する文章を増やしていきます。

≪ステップ1≫ 結論の暗記！

1 要請内容

継続性の原則は、

毎期継続して適用することを要請している。

≪ステップ2≫ 少しずつプラス！

1 要請内容

継続性の原則は、

二つ以上の会計処理の原則また

は手続の選択適用が認められている場合に、

毎期継続して適用することを要請している。

≪ステップ3≫ 完成！

1 要請内容

継続性の原則は、一つの会計事実について、二つ以上の会計処理の原則または手続の選択適用が認められている場合に、企業がいったん採用した会計処理の原則および手続を毎期継続して適用することを要請している。

【手順3】あとは、ひたすら暗記する！（書き始めの言葉に着目！）

最初の言葉さえ出てくれば、その後の文章も自然に続く場合が多いです。始まりの言葉に着目して暗記してみましょう。有形固定資産の取得原価を例に上げてみます。

《ポイント》

1 購入

固定資産を購入によって取得した場合には、

2 自家建設

固定資産を自家建設した場合には

3 現物出資

固定資産を現物出資により受け入れた場合には、

4 交換

(1) 自己所有の固定資産と交換に固定資産を取得した場合には、

(2) 自己所有の株式ないし社債等と固定資産を交換した場合には、

5 贈与

固定資産を贈与された場合には、

いかがでしょうか。

気の遠くなるような長い文章も、ステップをふむことで覚えられるのです。

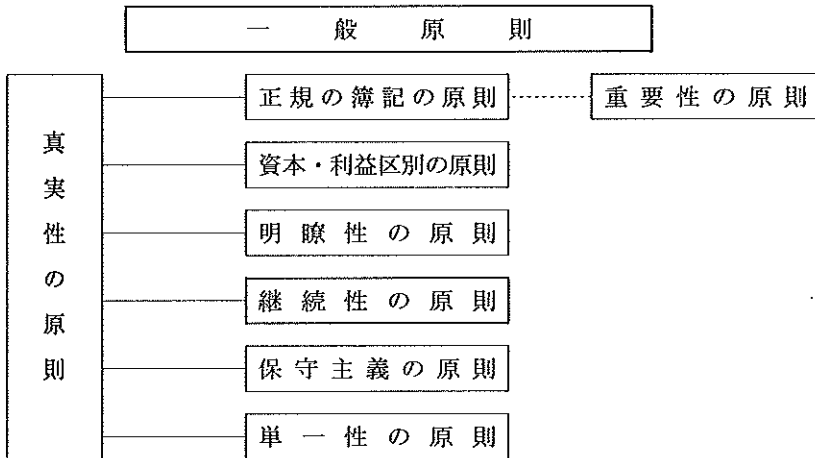
5 暗記の定着！

暗記をしたポイントについて、大枠を思い浮かべてみましょう。

【論点ごと】

暗記するポイントを含む論点全体を把握します。

- * そのポイントは、どのような論点に含まれていましたか？
- * 関連するポイントは、どのような内容でしたか？



【ポイントごと】

次にそのポイントにはどのような内容が書かれているのか、タイトルのみをあげてみましょう。

1 要請内容

2 必要性

3 継続性の変更

← この原則は、どのような内容を要請しているのか。

← なぜ、この原則が必要とされるのか。

← 変更はどんな場合でも認められないのか。

タイトルを思い浮かべることで、ポイント化されている論点のストーリーや流れを理解することができるのです。

これらのことは、机に向かわなくても、又あまり時間をかけなくても、頭の中でイメージするだけで確認することができます。また、横断的な関連性がみえてくることによって、理解力や応用力も養うことができます。

6 暗記に挑戦!

それでは、これまでの内容をもとに、下記の題材を用いて実際に暗記をしてみましょう。

【手順1】文章の構成を確認しながら、キーワードを覚えてみましょう。

株主資本の区分の基本的考え方

1 企業会計基準における資本（株主資本）の区分

《ポイント》

1 区分内容

企業会計基準によれば、株主資本は、資本金、資本剰余金及び利益剰余金に

↑ 前提

↑ 区分内容

区分される。

2 区分理由

企業会計基準では、投資者保護のための情報開示の観点から、取引源泉別に

↑ 区分にあたっての考え方

↑ 着目点

資本取引から生じた維持拘束性を特質とする払込資本（資本金・資本剰余金）

↑ 区分その1

と、損益取引から生じた処分可能性を特質とする留保利益（利益剰余金）を区

↑ 区分その2

別することに重点を置いているためである。

2 会社法会計における資本（株主資本）の区分

《ポイント》

1 本来的な区分

① 区分内容

会社法によれば、株主資本は、資本金、準備金及び剰余金に区分される。

↑ 前提

↑ 区分の内容

② 区分理由

会社法では、株主と債権者の利害調整の観点から、分配可能額を構成する

↑ 区分にあたっての考え方

↑ 区分その1

剰余金とそれ以外の資本金及び準備金に区別することに重点を置いているた

↑ 区分その2

めである。

【手順2】少しずつ暗記をし、徐々に覚える文章を増やしていきましょう。

ステップ1 結論をのみをおさえます。

企業会計基準では、払込資本と留保利益を区別することに重点を置いているためである。

会社法では、分配可能額を構成する剰余金とそれ以外に区別することに重点を置いているためである。

ステップ2 これに、修飾句や目的語等を肉付けしていきます。

企業会計基準では、投資者保護のための情報開示の観点から、取引源泉別に資本取引から生じた維持拘束性を特質とする払込資本(資本金・資本剰余金)と、損益取引から生じた処分可能性を特質とする留保利益(利益剰余金)を区別することに重点を置いているためである。

会社法では、株主と債権者の利害調整の観点から、分配可能額を構成する剰余金とそれ以外の資本金及び準備金に区別することに重点を置いているためである。

この手順で覚えると、

- * 落としてはいけないキーワード
- * 文章の構成、骨子
- * それらを修飾する言葉 が、順序よく覚えられます。

暗記が完成した後は、定期的に反復を行い、暗記の定着を図っていきます。

暗記をしたポイントについて、大枠を思い浮かべてみましょう。

ポイントを覚えた後には、なるべく記憶が持続するように、又応用的な問題にも対処することができるよう、大枠を思い浮かべながら体系的なイメージを付けていきます。

企業会計基準 → 投資者保護のための情報開示の観点

資本取引から生じた維持拘束性を特質とする払込資本

損益取引から生じた処分可能性を特質とする留保利益

↑取引源泉によって区別

資本金
資本剰余金
利益剰余金

会社法会計 → 株主と債権者の利害調整の観点

分配可能額を構成しない資本金及び準備金

分配可能額を構成する剰余金

↑分配可能額を構成するか否かによって区別

資本金
準備金
剰余金

では、設例に挑戦してみましょう。

.....

設 例

1 企業会計基準における株主資本の区別について、その内容と区分理由を述べなさい。

2 会社法会計における株主資本の本来の区別について、その内容と区分理由を述べなさい。

お疲れ様でした。解答は以下のとおりです。

.....

解 答

1

企業会計基準によれば、株主資本は、資本金、資本剰余金及び利益剰余金に区分される。
--

これは、投資者保護のための情報開示の観点から、取引源泉別に資本取引から生じた維持拘束性を特質とする払込資本（資本金・資本剰余金）と、損益取引から生じた処分可能性を特質とする留保利益（利益剰余金）を区別することに重点を置いているためである。

2

会社法によれば、株主資本は、資本金、準備金及び剰余金に区分される。

これは、株主と債権者との利害調整の観点から、分配可能額を構成する剰余金とそれ以外の資本金及び準備金に区別することに重点を置いているためである。

解答要求である「内容」と「その理由」を暗記し、正確に書けましたか？

7 おわりに

本日の暗記セミナー、いかがだったでしょうか。

上述のことをまとめると、理論の効果的な学習には、以下の2点に注意をはらうことが必要です。

＊ 暗記をする時には順序だてて覚え、又定着を促すように体系や大枠をイメージつける。

・・・・・・質のよい暗記

＊ 暗記をした後は、反復することによって、長期的な記憶として定着させる。

・・・・・・暗記の固定化

財務諸表論を含め、税理士試験で合格するには相当量の暗記が不可欠です。

つまり、「税理士」資格を勝ち取るには、暗記の効果的な学習方法を身に付けることが必須なのです。

当セミナーが、みなさんが今後学習していく上での一助となれば幸いです。